

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の 1年度目)

1. 研究課題

(和文) 環境インフラストラクチャー：自然、テクノロジー、環境変動に関する比較研究

(英文) Environmental Infrastructures: A Comparative Study on Nature, Technology and Environmental Change

2. 研究代表者

(氏名) 森田 敦郎

3. 研究期間

平成 25年 4月 から 平成 28年 3月 まで

4. 研究目的 (400字程度)

温暖化等のグローバルな環境変動が進む今日、われわれの自然についての知識は、気候モデル、環境指標、情報アーカイブといった科学技術にますます依存するようになっていく。本プロジェクトはこうした技術と組織の体系を、近年の科学技術論における大規模技術システムや情報ネットワーク (=インフラストラクチャー) についての議論を取り入れ、「環境インフラストラクチャー」として概念化することを試みてきた。これは、社会ないし人間集団が環境との関係を組織する一連のテクノロジーと組織の総体で、人々が彼らを取り巻く環境を「知り」、それに対して働きかけることを可能にする基盤となっている。本プロジェクトでは、この環境インフラストラクチャーに焦点を当て、グローバルな環境変動と地域社会の関係を科学技術の媒介的な役割を考慮に入れて捉えることを目的としている。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

初年度である本年は、9月に開催した国際シンポジウムとワークショップを核として、国内・海外の共同研究者の研究発表を活発に行った。通常の研究発表としては、4月に京都大学の森下翔が地震学のモデルと不可視性について、7月に立教大学の中川理がフランスの青果市場におけるモデルと現実について、京都大学の石井美保が南インドにおける開発と神霊祭祀についてそれぞれ発表を行った。9月20日に開催したGraduate Workshopでは、大阪大学の鈴木若菜、IT U of CopenhagenのLea Schick、日本学術振興会の中空萌が発表を行った。9月21日に“Acting with non-human entities”と題して開催した国際シンポジウムでは、York UのNatasha Myers、京都大学の石井美保、UC IrvineのMei Zhan、U CambridgeのMatei Candeaがそれぞれ研究発表を行った。9月22日の国際研究会では、筑波大学の木村周平が災害復興について発表を行った。12月には東京外国語大学の久保明教が物語とインフラストラクチャーについて、東京大学の松本篤が地域映像アーカイブ・プロジェクトについて発表した。1月にはToronto UのShiho Satsukaを招聘して研究会を行った (以上、敬称略)。

6. 研究成果の概要 (400字程度)

本年度に行った研究会では、科学的実践や市場の取引におけるモデルと現実の関係、人間と非

人間の交渉における感情や親密性の問題、物語の構築とインフラストラクチャーの関係といった興味深い共通のテーマが見いだされ、「環境インフラストラクチャー」という概念をめぐる共同研究者の認識が一段と深まった。共同研究会で得られた新たな知見を元に、それぞれの共同研究者が積極的に論文を執筆し、国際ジャーナルを含む学術誌への投稿を果たしている。また、9月に開催した国際シンポジウムとワークショップでは、国内・国外から多数の参加者を得ることができ、共同研究のネットワークが広がりをみせるとともに、全国共同利用・共同研究拠点としての人文科学研究所の役割を果たすことができた。この国際シンポジウムに招聘した海外の研究者とは、その後も国際学会でパネルを組むなど協力関係が持続している。また、この国際シンポジウムで口頭発表されたペーパーは2014年中に刊行を予定している。

7. 共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など）
 公開シンポジウム：Acting with non-human entities（京都大学人文科学研究所, 9/21）
 学会分科会：Environmental Infrastructures, American Anthropological Association, Chicago 11/24

8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区 分	機関数	受入人数		延べ人数	
		外国人	大学院生	外国人	大学院生
学内（法人内）	2	3	1	21	7
国立大学	4	9	3	63	21
公立大学	0	0		0	
私立大学	2	2		14	
大学共同利用機関法人	0	0		0	
独立行政法人等公的研究機関	1	1		7	
民間機関	0	0		0	
外国機関	6	6		19	19
その他	25	25	4	33	12
計	40	46	4	157	28

研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

(例) ・1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた（参加した場合）：参加人数2人、延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数
 (参加研究者がファーストオーサーであるものを対象)

論文数	10
うち国際学術誌に掲載された論文数	5
()	()

※下段の（ ）内には、拠点外の研究者による成果（内数）を記載。

(注) 分野の特性を踏まえて、参加研究者がファーストオーサーである場合の他に、コレスポンディングオーサーである場合や指導した大学院生がファーストオーサーになっている場合など、論文

における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合は、その役割を明示の上で論文数を記載。

役割			
論文数			
	うち国際学術誌に掲載された論文数	()	()

※下段の () 内には、拠点外の研究者による成果 (内数) を記載。

※ 高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、掲載論文数、そのうち主なものを以下に記載。

※ 拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
<i>Science, Technology and Human Values</i>	1	The Ethnographic Machine: Experimenting with Context and Comparison in Strathernian Ethnography	Atsuro Morita
<i>Journal of the Royal Anthropological Institute</i>	1	Playing with perspectives: spirit possession, mimesis, and permeability in the buuta ritual in South India.	Miho Ishii
<i>East Asian Science, Technology and Society: an International Journal</i>	1	Plastic Comparison: The Case of Engineering and Living with Pet-Type Robots in Japan	Akinori Kubo

(注) インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合は、以下に適切な指標とその理由を記載上で、掲載雑誌名等を記載。

拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

インパクトファクター以外の指標とその理由		主なもの	
掲載雑誌名	掲載論文数	論文名	発表者名